

## 保育者と親との関係づくりに関する研究

### —その2 民間研究団体の機関誌の分析から—

○脇 信明 (別府溝部学園短期大学) 井口 均 (長崎大学) 大元 千種 (筑紫女学園大学)  
 黒川 久美 (鹿児島大学非常勤講師) 高田 清 (福岡教育大学) 田中 洋 (大分大学)  
 菱谷 信子 (精華女子短期大学) 宮里 六郎 (熊本学園大学)

#### 1. 研究の目的

昨今、気になる子どもや荒れる子どもが保育現場で問題視されている。それと同時に子育てに対する親の意識も変化と同時に多様さを極め、相互理解を得ることが難しいという保育者からの声も聞かれはじめている。先の児童福祉法の改正により、保育者の職務の一つとして「親の指導」が法制化された。これまでは「助言者」であった立場から、一気に転換を遂げその責務も大きくなった。また、保育所では「苦情」処理システムの導入など、保育者と親との関係がサービスの提供者と利用者との構図へと変質させられる懸念があり、他方では子育て支援事業の拡大により、積極的な親支援の必要に迫られており、その関係性には齟齬が生じており、あらためて両者の関係づくりについて検討する必要性がある。

そこで、前回に発表した、『保育者と親との関係づくりに関する研究—その1 国の施策と保育学会における研究の動向から—』の一連の研究として、今回は保育関連の民間研究団体の機関誌において、どのような保育者と親との関係性が述べられており、また保育実践が行われてきたのか、その歴史的動向を探ることを本研究の目的とする。

#### 2. 研究の方法

民間研究団体の機関誌より、全国保育問題研究協議会の『季刊保育問題研究』(以下、季保と表記する)から親との関係性が見られる実践報告を70年代後半から拾い上げた。また全国社会福祉協議会の『保育の友』(以下、保友と表記する)からは親との関係づくりの特集記事をひろい、この2つの機関誌をもとに検討を試みた。また、全障研および全生研『生活指導』も動向を探る参考とした。

#### 3. 結果と考察

##### 1) 70年代後半 一親批判的から歩み寄る姿勢へ

親の就労時間の長時間化にともない、延長保育の要求が親から出てくる。同時に仕事の忙しさからくる生活態度の乱れ(朝食抜きや遅寝等)が目につくようになった。これは子どもにも影響が表れ、その原因である親に対して保育者は説教をするなど、批判的な対応をしている。しかし一方では、子どもの

生活保障のために親の不十分な子育ての認識を、説教的・批判的に伝えるのではなく、一緒に改善策を考えていこうという、親に歩み寄る保育者の関わり(季保63号)も提起されている。

##### 2) 80年代 一親教育から理解しあう共感関係へ

核家族化の進行や親の教育力低下などが社会的問題として取り上げられており、長時間労働等、就労状況の悪化に伴い、より親の生活の崩れは深刻化し、とりわけ若い親の養育態度に対する価値観の違いが保育者の大きな課題となる。季保71号では、子どもの生活実態調査から、子どもの生活内容の改善を親に要望し、懇談会や学習会を通して親の意識変化を求めている。同76号では子どもの生活を変えることで、子どもの生活を親が守る意義を保育者が教えるといった、積極的な「親を変える」関わり(親教育)の実践報告が出されている。同時期に全障研においても親との関わりを両親教育・両親指導という言葉を使用しており、系統的な親教育をすることで家庭での発達保障を促すという取組みがなされている。他方で、厳しい親の就労状況を理解し、保育者が仕事の支えになるような保育をするという、親の生活に共感する姿勢(季保83号)や、運動会や保護会活動などを通して親同士が結びつき、保育者と一緒に子育てを学ぶことを通して、親も一緒に直ち合える関係づくり(季保104号)が提起されている。クラス便りやお便り帳などを利用して互いの家庭の様子や仕事の様子を知りあうなど情報の交流を通して理解しあえる関係づくりや、子どものことについて、親と保育者が一歩も引かず論議し合える関係を互いに認めあいながら信頼関係へと発展している報告(季保116号)もある。

このように80年代は、「親を変える」といった保育者側からの積極的介入が見られる。これは育児力の乏しい親に対して「教える者」と「教えられる者」といった関係であり、親としての権利や尊重、および主体性を考慮した関係づくりとは言いがたい。一方で、親の厳しい状態や子育ての難しさに理解を示しながら、子育てや子どもの成長について親も保育者も話し合い、同じ子育てに携わる者としての並列

的な共感関係を切り結ぶ様子も伺えた。それが発展するように「育ち合う」「理解しあう」「信頼しあう」と子どもの育ちを媒介としながら“親と共に手をつないで”という関係に変化を遂げていると考えられる。

### 3) 90年代以降 一子育ての共有関係(共育て)、とパートナーシップ、そして今日的課題

1.57 ショックに代表されるように「少子化」が進行し、地域の子ども減少による「親の孤立化」と「育児不安」を引き起こすなど子育てが社会問題と政治問題として大きく取り上げられた。またいわゆる「新人類」世代が親となり、親の様変わりがより顕著になる。保友'95-11号では特集として「非常識な親」を取り上げ、今の親の子育ての力と生活力の低さ、そして他の親との関係づくりの下手さを課題として取り上げながらも、親理解の一つの見方として「よい母」のイメージに捕われ、親自身の力とのギャップに悩みを持っているという見方を示しており、保育者が受けとめることの大切さを述べている。季保160号でも、紙おむつ・コンビニ弁当なども、そうせざるを得ない親の現状を受け止める姿勢が、親の安心感と保育者への信頼感(信頼関係)につながるとしている。また、同124号において、「共育て」という関係が出てくる。これは、子育てを親と共有しあい、相談しあう関係という意味である。保友'97-8号においても、同様に「共育てのすすめ」として共に育てていく感覚が親との連携で必要であると同様に述べられている。子育てを、親と保育者が共有しあい、お互いの立場や状況を理解しつつ共に信頼しあう関係をつくるという、「子育てのパートナー関係」の確立への取り組みであるとも言える。保友'96-10号においても、これからは親の生活と保育者の生き方が理念として一致する方向性を模索しつつ、「親とのコミュニケーションを大事にしながら、パートナーシップとしての親、あるいは子育てについての共育ての関係」が重要であると述べている。'00年前後にかけて、保育に対する親の状況や意識の変化にともない、親と保育者の関係に多くの課題がでてくる。一つに、保育サービスを利用し子どもを「預けている」といった権利者意識からくる「お客さん」的参加や「自己本位」的関わり方である。季保185号では、発表会で自分の子どもの出番が終わると帰る親や、園の保育方針を受け入れない親の姿に対し、行事を共につくる過程で親が楽しみと変化し、観るだけの親から共に行

動する親へと変わった。また保育に親も参加する保育参加日を設定し、子ども理解を促すなど、親が楽しみながら主体的に参加できる状況をつくり、保育に対する考えを自ら変えている報告がある。一方で、倒産やリストラなどで親が子どもにじっくり向かい合えない状況の中、保育への関心も低い親とのコミュニケーションづくりをどうするか(季保191号)や、母親集団の派閥化、預けっぱなしの親、生活問題、虐待問題、そして保育者と親との関係だけでは解決できない問題(地域のネットワークづくり等)が今後の課題として存在する。

### 4.まとめと今後の研究の課題

80年以前は親の生活力や育児力の乏しさを批判しながらも、徐々に親への歩み寄り姿勢が始め、80年代に入ってから、子育ての意義を伝え積極的に親を変える“親教育”が展開される。しかし、もう一方では“親理解”や“共感関係”づくりの取組みがなされ、子育ての主体者としての親の変化を信頼しての関係づくりと言えよう。90年代に入ってから、親の状況やニーズを受けとめつつ、そこからの“信頼関係”をもとに子どもを共に育てていく“共育て”という子育ての共同関係や、“パートナーシップ”へと発展した。保育者が「親を変える」という意識から、保育者や他の親と交わることをくぐりながら「親は変わる」という意識へ大きくシフトしているのである。しかし、近年は親理解が難しくなり“コミュニケーションづくり”とそれからの信頼関係づくりが課題視されている。大宮(2003)はオーストラリア幼児協会の倫理綱領を紹介する中で、親は子育ての主体者であり大切な権利を持つ対等なパートナーであり、保育者は親との違いを認めあいつつ、「いい親」の固定観念を捨て、家族の視点から考えることが今後の保育者に求められる力であり、親との関係で重要な視点であると述べている。従来と価値観の大きく違う親と保育者の相互理解が難しい中、互いに子育てのパートナー関係となるためには、どのような過程を辿る必要があるのか今後の研究の大きな課題であるが、大宮の指摘は今後の関係性を研究する上で大きな参考となるであろう。今回の研究で歴史的な動向をみる事ができた。今後は「共育て」や「パートナーシップ」など保育者と親関係をめぐる最近のキーワードについて、その内実が一層明らかになるよう実践現場や親たちへのアンケートやインタビュー調査を通して、実証的に研究していきたい。